これまでを振り返えさせられて。

こをり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
これまでを振り返えさせられて。

【Ｎコード】
Ｎ８１２０Ｖ

【作者名】
こをり

【あらすじ】
今まで書いた作品をチョー簡潔にご紹介。

（前書き）

一番最初のモデルたちが大暴れ！

登場人物

レッド（赤井）♂：身長１８０越え頭が凄くいいのに性格が残念。何か口を開いたと思ったら残念な事ばかりでも面白い、歳は私より１つ上。

ブルー（青菜）♂：レッドと一緒によく悪乗りでやばい事をし始める。でも時々すべる（笑）聞いた話じゃ学校ではアイドル状態（もちろんお笑いの）ピンクの弟。

グリーン（緑川）♀：私。主にツッコミ役だと信じて疑わない。身長が１５０だがくじけない。レッドとブルーと一緒に悪乗り大好き。

イエロー（黄伊）♀：この中で一番まとも（？）悪乗りをする時としない時が分かれている。顔が綺麗（羨ましい）意外と大食い。

ピンク（桃華）♀：ほんわかしていて楽しい。悪乗りはもちろんする。いざと言う時はお姉さん。絵が得意、歳は私より１つ上ブルーの姉。

「おーい緑川！・・・あーまた書いてる」
「うるさいなー青菜のバカ声。って覗き見しないで！」

「なになに？『半実話物語』？あーこの前流し素麺した話？あれは楽しかったなー」
「赤井のせいで台無しだったね。まぁ最後に食べたかき氷は美味しかったけど」
「黄伊と桃華は赤井の存在スルーしまくってたし」
「「また5人でなんかやりたいねぇ」」

「お、まだまだ書いてんじゃん！この大学ノートちょい読まして！」
「ダメダメダメ！なに言ってんだクソ野郎！シャー芯全部折って次のテストのとき冷汗かかせるぞ！」
「ヴァーカ！俺は鉛筆主義者なんだよ」
「グラファイトーぉ！」

「さーて次は？『ケータイの恋』緑川って意外と乙女だもんね」
「いやそうじゃなくて。ほら、前に桃華がトイレにケータイ落したじゃん？」
「そこから恋愛小説ネタを搾り出すなんて・・・サイテー」
「あ゛？だったらケータイと便器の濡れ場でも書いたろか？ん？」
「地面に頭をこすり付けるからやめてください」

「うーデコがヒリヒリするわー」
「ドMにはご褒美でしかなかったか・・・クソ」
「よし！次行ってみよー！『一目惚れだなんて嘘』ふんふん、なるほろ。これは君がモデルかね？」

「口が悪いといいたいのか」
「テヘペロ☆」
「よーし。歯ぁ食いしばれ」

「『美女の悩み』確かに可愛い子は同姓から嫉まれるって聞くよなー」
「これは黄伊がモデル。あの子全然か弱くないけど」
「ネクラな男子に恋なんてしないけど」
「でも、一時期嫌われ者だったよ。お嬢様ぶってるーって」
「ヤダ怖い。でも俺、黄伊の気持ち分かるかも」
「え、もしかして青菜もいじめられて・・・」
「俺の美しさは、見るものを全て虜にしてしまう」
「誰か１１９お願いしまーす」

「うぇえ！なにこのシリーズ『俺＝おいしい』『私＝甘い』『自分＝まずい』怖いよ！」
「ちょっと病んでた時期がありまして」
「もー今日はお昼ご飯食べられなーい！だから５００円貸して？」
「弁当忘れただけじゃねーか！」
「ちぇっ、仕方ないから自分の指でもたーべよ！」
「あ、カッターあるよ？よかったろどうぞ」
「嘘でもいいから止めてよー！」

「『サボリ？いいえ探検です』いいなー。俺も不思議な世界行ってみたいわー」
「カッター使う？行けるかもよ？」
「それ使って行けるのはあの世だけ！」

「あ、ほら今話題のエコの話でしょ？この『涙なんてただの水じゃない』ってのの」

「ちげーよ。あとエコ全然関係ないから」
「【泣いた所で何も解決しないんだから。いい加減学習してよね。】こんな事言われたら泣いちゃうよ」
「このモデル青菜だよ」
「嘘！こんな酷い事言わないし！」
「いや、こっちの飛んだ方」
「屋上ダイブは俺に任せて☆ってどないやねーん」
「うっせ」
「ひっど」

「長っ！タイトル長いよ！『君にあげられる愛は小指の先、いや蟻の頭くらいならわけられる。と彼は口だけで笑いながら言っていたがそんなのは嘘だろうと私は長い前髪で笑わない目を隠した。きっと、いや、絶対気づいているだろうけど』っっっはぁー！肺死んじゃう！」
「このモデルは赤井くんでーす」
「・・・・赤井くんはこんなんだったっけ？」
「テンションは真逆だけど、ポンポンってリズムに乗った会話をする人じゃん？」
「あ、あーなるほろ！それは納得！」
「人の揚げ足取るの上手いし」
「言い方がいちいち遠回りだし」
「「哲学的な話好きだし」」

「もしやこれ悲恋じゃね？『壊れたのは恋？君？それとも僕？』・・・うわー、さっきの『ケータイの恋』とちょい似てる」
「あー無機物が恋愛感情を持つ、ってとこ？」
「違った？この夢名、も主人公と話するの楽しみにしてたんじゃねーの？」
「男はロマンティスト、女はリアリスト」

「深読みしすぎってか？」
「いい意見ありがとうございましたー」

「おや、クーデレに挑戦ですか？この『化物彼女に溺愛中！』は」
「これも黄伊がモデル」
「女王様ですね。わかります」
「なんか黄伊って尽くされそうな気がする」
「あーかか天下？」
「亭主関白ありえない」

「『夏、醜い、私』こんな彼女をいただきまーす！」
「第一に相手のことを考えてくれるなんて羨ましいよね」
「でも、この彼氏はないわー。いくら周りにばれたくないからって」
「男ってそういうのじゃないの？」
「俺はどっちかって言うと、自慢したい！くぅー！彼女作りてー！」
「作れば？はい」
「紙と鉛筆とはさみ。よし！がんばって可愛く描くぞ！」

「ん、ん？マ、マザー『Ｍｏｔｈｅｒ　Ｃｏｍｐｌｅｘ』？発音あってる？」
「これくらい読めよ」
「女子の意見からして、こんな男の子はやっぱ引く？」
「私は、引く」
「私も無理」
「んー私はアリかも」
「俺はギリ無し」

緑川「皆いつの間に湧いてきたんだよ」
青菜「ごめん、この会話に参加する必須条件は、女性、だから」
赤井「そんなことだろうと思い、性転換手術なう！」

黄伊「こんなところにカッターが」
赤井「やめてー！あたいのパイオツがー！」
桃華「黄伊、遠慮なく割っちゃって。その左右の大きさが違う乳房を」
青菜「赤井！水風船がもったいないだろ！」
赤井「さーせん！って嫌ーぁ！服がびしょ濡れじゃない！」

黄伊桃華青菜緑川「きったね」

赤井「え、ただの水だからね？アンモニアじゃないんだよ？」
緑川「スクープ！成人一歩前にもかかわらず赤井青年、失禁だぁー！」
緑川「今どのようなお気持ちですか？」
黄伊「なにか謝罪の一言を！」
桃華「赤井さーん！どうなんですかー！」

赤井「・・・むしゃくしゃしてやった。今は反省している」
黄伊「剥ぐぞ」
赤井「はぐの！？」
緑川「おら、尻だせファッキンボーイが」
青菜「オラの水風船がぁ」

桃華「あと片付け」

赤井「イエッサー！！」

これからまだまだ増える私の大学ノート。
そのたびに、こいつらが大暴れするんだろうなぁ。

（後書き）

それを楽しみにしているだなんて、本末転倒じゃないか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8120v/

これまでを振り返えさせられて。

2011年8月15日03時16分発行